

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4392700235		
法人名	社会福祉法人 小国町社会福祉協議会		
事業所名	グループホーム なごみ		
所在地	熊本県阿蘇郡小国町宮原425-8		
自己評価作成日	令和3年1月5日	評価結果市町村受理日	令和3年3月16日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41—5		
訪問調査日	令和3年1月19日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「私たちはあなたの気持ちに添って支えます」「私たちはあなたと笑って過ごせる環境を作ります」「私たちはあなたとの縁を大切にします」の3つの介護理念を基に、認知症となられても尊厳をもってその人らしく最期の時まで幸福に生きることが出来るよう、尊厳と愛情をもって支援に努めています。ともに過ごし、笑い、喜び、お互いに「あなたが居てくれて良かったと感謝しあえる関係性を持つ事が目標です。のんびりと、自分のペースで、馴染みの暮らしの中穏やかに過ごし頂けるよう支援します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

勉強会で、理念の求めるものは何なのかを話し合い、毎月のケア会議で利用者一人ひとりについて理念を踏まえたケアについて検討し、実践に繋げている。ホームでの看取り介護については入所時から繰り返し家族に説明して理解を深め、終末期の在り方についての意向を入所時及び半年ごとに確認し、家族・主治医・協力病院・訪問看護等と連携してより良い最期を迎えられるよう対応している。災害訓練では職員数の少ない暗い夜間にも実施することで、いくつかの課題が発見されるなど、効果的な訓練となっている。また、全職員が役割を持つよう業務改善のための各種委員会を設置し、研修も担当職員が持ち回りで講師を務め、毎月全職員が全利用者の状況をモニタリングシートに記載してケア会議に臨むなど、職員の質の向上と利用者へのサービスの質の向上に熱心に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	3つの介護理念を基にその方らしく住み慣れた地域で穏やかに暮らしていけるよう、管理者、介護職員は実践を行っている。その都度利用者様がどうしたいのか考え、その方の視点に立ったケアを心掛けている。理念が常に身近なものであるように、1日2回の申し送りでの理念の唱和をしている。	理念は、玄関・事務室・廊下など、目につくところに掲示するとともに、1日2回の申し送りの際に唱和して共有を図っている。勉強会で理念の求めるものは何なのかを話し合ったり、毎月のケア会議で理念を踏まえたケアについて利用者一人ひとりについて振り返りながら検討し、実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所が閉鎖的なものにならないよう、地域に開かれた存在となり、かつ事業所自体が積極的に地域参加したいと考えているが、今期はコロナウイルス感染症防止のためボランティアを招く事もできず、また地域の催し等も中止となる事が多く参加する事が出来なかった。	例年は、地域の祭り等のイベントに参加したり、日本舞踊や大正琴等のボランティアに来てもらうなどの交流が行われていたが、今年度はコロナの影響で地域との交流はほとんど行われていない。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症カフェに事業所の職員が参加している。今期はコロナウイルスがあり活動が出来なかった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期的開催し事業所の状況、活動内容、ヒヤリハット等を報告している。参加者より意見を頂き検討、改善できるようにしている。今期はコロナウイルス感染症防止のため1月と6月の2回の開催となってしまったが、コロナ禍における利用者様の外出等について意見交換も出来ている。	今年度はコロナの影響で、6月だけの開催となっている。会議では、入居者の状況・ヒヤリハット・コロナ感染対策等の報告後、コロナ禍での外出等について意見交換を行っている。	会議を中止した際は、委員に対してホームや利用者の状況を書面で報告し、意見・提案等を得ることが期待される。また、地域代表委員がほとんど会議に参加していない状況であり、参加してもらうための工夫や、地域代表委員の開拓も望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	役場福祉課の担当を運営推進会議メンバーに招きその場で事業所の状況や課題について報告、相談する機会が来ている。運営推進会議の他にも事業所運営について直接相談したり、地域福祉への取り組みへの参加も行っている。	町担当者とは、ホーム運営上の質問など気軽に相談したり、提出物は直接持参して話をしたり、小国郷の安心ネットワークに参加して地域福祉に関して情報を共有するなど、協力関係ができています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設内勉強会の他、運営母体主催のスキルアップ研修へ全職員が参加し身体拘束による弊害について理解し、自分たちのケアが身体拘束になっていないか、日々振り返りながらケアに取り組んでいる。	ホームでの勉強会の他、母体法人での研修に全職員が参加して研修レポートを作成し、研修内容への理解を深めている。落ち着いた方の連れまわし行為や利用者の行動を制止する言葉かけなど、自分の都合でやっていないか、拘束にあたるのではないかなど、職員になげかけ、全員で考えて、拘束をしないケアに努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内勉強会の他、運営母体主催のスキルアップ研修へ全職員が参加し虐待防止に努めている。潜在的な危険が排除出来るよう、働きやすい職場環境づくりを考え、健康診断でのストレスチェックの実施もされている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修へ参加する事で制度について理解はできているが、利用者、家族等に周知、活用するまでには至っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所時、契約の更新の際には重要事項の説明と契約内容についての説明をして同意を頂いている。その他にも必要な物が生じたり変更があった時にも必ずご家族に説明、同意を頂くようにしている。今期はオムツ代金負担についての見直しを行いご家族にも同意を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族とお話する機会(担当者会議や利用者との面会、電話連絡等)の際にはご意見やご要望についてお尋ねするようにしている。	家族の面会時には、どの職員でも利用者の状況報告ができるよう努めており、併せて家族からの意見・要望等を聞くようにしている。コロナ禍の現在は面会が困難であるため、利用者について連絡を下さいとの声が聞かれ、毎月送付している近況報告に写真を挿入し家族の安心に繋げている。コロナ終息後の家族会では、楽しいイベントのみでなく、家族との意見交換や家族同士の交流が図れるものなど、在り方を検討したいと考えている。	入居者の近況報告の際の写真の添付は、コロナ終息後も引き続き行われることが期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員一人ひとりとの面談のほか、現場職員の意見が出しやすいよう、業務改善委員会を設置し現場の声を大切にするようにしている。	毎月のケア会議では、利用者一人ひとりのケアについて検討し、よりよいケアに反映させるよう努めている。また、感染対策委員会・給食委員会・安全委員会など各種の業務改善委員会を設置し、職員それぞれが役割を持って考え、報告し、意見を出し易いようにと工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の自己評価、取組みたいこと、要望などを提出して頂き、管理者を交えての面談を実施し、職場環境をはじめ条件整備に努めた。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	当、法人が年間計画で開催しているスキルアップ研修への参加要請をはじめ専門的な研修参加への要望に応えスキルアップを図った。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	当、法人のスキルアップ研修をはじめ、小国郷医療福祉安心ネットワークへのリモート会議の参加要請を図るなど同業者との意見交換を図ることができた。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談から入所になられる際はアセスメントはもとより、本人、家族と会話を十分に行うようにしている。特にご本人の望まれる暮らしに添えるように努めケアプランに反映している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の立場になって思いを傾聴し安心して頂けるように努めている。新しく入所される方へは職員の顔写真つき紹介パンフをコメント付きでお渡し少しでも不安が解消できるようにした。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期段階における支援が適切であるか、ご家族へ報告、相談しながら、その都度安心し納得頂けるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	野菜切りや洗濯物の世話など、出来ることを一緒に行ったり、これまでの暮らしぶりをご家族より情報収集し施設においても意図に添った暮らしが出来るように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍にあり面会も制限があるなど本人とご家族の距離が遠くなりがちであるが、毎月の報告書のほか、家族への連絡をこまめに行い共に本人を支えていく関係性を築けるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍にあり以前のようにどこへでも外出できる事はなかったが、行きつけの美容室に他のお客さんが少ない時を見計らって行ったり、馴染みの方に手紙が出せるよう支援した。	従来は、自宅での法事や祝い事の際に送迎したり、家族と外食に出掛けたり、地域の商店に買い物に行くなど、馴染みの関係継続支援に努めているが、コロナ禍の現在はドライブで近辺を回ったり、家族に年賀状や手紙を出すなどして関係継続を図っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	車いすを押してあげようとする利用者には危険がない様傍で見守ったり、寝たきりの方の部屋へ誕生日祝いに皆さんで集まったり、利用者同士の関係性が築けるよう、トラブルにならないよう介入しながら見守っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	事情で退所となられる時ご本人のご様子やケアや健康状態についての情報がその後も継続出来るよう小国郷情報ケアシートの活用や他事業所への引継ぎとして行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケア会議等で理念の具現化を行い利用者の思いの理解に努めている。大きな催事の際に飲酒の希望を取り入れたりいつもきれいに過ごしたいという思いに添って毛染めをしたり思いに添えるように検討し実施した。	日頃から、要望を聞き出せるような声掛けをするよう心掛け、困難な場合は家族から情報を得て好きな物、やりたいことなどの把握に努めている。大正琴が好きな方は琴を持って来て弾いたり、大正琴の会の方に来てもらったり、編み物の好きな方にはアクリルたわしやコースターを作ってもらったりと、意向に沿った生活ができるよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	情報ケアシートの活用、ご家族からのこれまでの暮らしについての聞き取り、本人様との会話から情報収集に努めこれまでの生活を知るように努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	申し送りなどで把握し、その時の利用者様の状態を共有し次に生かすように心がけている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	一人一人の視点で毎月モニタリングシートに記載する事でさらに深くチーム以内で掘り下げて介護計画に生かせるようになった。ご家族とは状況報告等で要望などを聞いている。	毎月、全職員が全利用者についてモニタリングシートに記載し、それをもとにケア会議で職員の意見を吸い上げて介護計画を作成している。さらに計画をケアに活かせるように、アセスメントの取り方の勉強会を行うこととしている。利用者が穏やかに楽に生活できることを大切にプラン作成を心がけている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ICT化によって個々の記録のばらつきが目立ってきている。前日を振り返る習慣や見直す事が少なかったことが課題と思われる。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	以前同様本人の要望に応えるようにしているがコロナ禍で思うような支援が出来なかった。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	老人会主催の運動会の参加をしたり、地域にある温泉を楽しめるように共同浴場の足湯にお連れしていたがコロナ禍にあり現在外出が出来なくなっている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人の希望の受診も出来ており、訪問看護師を通し、主治医や専門医との連携も取れている。遠方の受診に関してはご家族と相談し対応できている。	利用者・家族の希望に沿ったかかりつけ医への定期受診と、状況により訪問診療が行われている。2週間に1回協力医療機関の訪問看護師による健康管理も行われ、密な連携が図られている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は利用者の日々の健康に関して些細な変化を施設内看護師に相談したり、訪問看護師からは専門的な意見を頂き、かかりつけ医と繋げていけるよう連携を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	小国郷情報ケアシートを用いて入退院時にスムーズに情報共有が行えている。入院先へ着替えなどをお持ちする際に情報交換が行えていたが、コロナ禍で面会が出来ず利用者の状態が分かり辛くなっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時より当、施設において出来る範囲をご理解頂いた上で看取り指針についての説明も行っている。その後も担当者会議などを利用し意向の確認にも努めている。ご家族様にも繰り返しの説明によって、御理解頂けるよう心掛けている。	「看取り介護に関する指針」を作成し、入所時に本人・家族に説明しているとともに、終末期の在り方についての意向を、入所時及び半年ごとに書面で確認している。看取り介護の開始にあたっては家族に詳しく説明し、同意書を提出してもらい、訪問診療・訪問看護を受けながら対応している。なお、定期的に看取りケアに関する研修を行ない、利用者の最期がより良いものとなるよう、努力している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	施設内研修で急変の備えに関しては理解できている。救急救命の講習の予定を立てているがコロナ禍にて実現していない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	夜間の火災を想定した避難訓練を行い、施設内での安全の確保の問題点や、難しさを具体的に課題検討し改善されている。7月豪雨の際は大規模停電も発生し、いざという時の備えの大切さを実感した。	年2回、火災避難訓練を実施。より効果的なものとするため、夜間の訓練も実施し、段差や砂利道の解消・明かりの必要性などの課題が発見され、改善も進んでいる。年1回は消防署の協力を得、日中の訓練には消防団の参加も依頼している。	運営推進会議委員にも訓練への参加を呼びかけ、意見を得るのも良いと思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	繰り返しの施設内研修やスキルアップ研修に参加する事で、意識付けをし更にアンケートなどで振り返りを行って対応や言葉かけを考え実践している。	接遇研修や、定期的な「虐待の芽チェックリスト」への記載で、利用者への対応や言葉かけについての振り返りを行い、誇りやプライバシーを傷つけることのないよう留意している。浴室の入り口には衝立を立て、脱衣介助の際にはタオルで隠したり、居室でのオムツ交換の際はドアを閉めてできるだけ露出部分を少なくするなど、配慮しながら対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定の支援としてその方々に応じた質問形式や声かけ、表情や身体の動きに注意し本人の意思の確認を行うよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の状況を見て意向の確認を行い臨機応変に取り組んでいる。自分で意思表示が出来ない方に対しても表情などから察し、その方のペースに合った暮らしが出来るよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	行きつけの美容室にお連れしたり、朝の整容の際にスキンケアを支援している。今後スキンケア教室やメイクアップ教室を取り入れたいと考えている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	法人の方針があり職員は施設の食事を摂らない事となった。且つコロナ禍にて食事を一緒にすることが出来ず、利用者同士もソーシャルディスタンスの観点から距離を取る事となっている。誕生日の方は好まれるメニューにしたり、季節の食材を取り入れている	以前、栄養士がたてた献立をもとに、給食委員会を通して利用者の嗜好や旬のものなどを取り込みながら、調理担当職員が家庭的な食事を提供している。お節や七草がゆ・鏡開きのぜんざいなどの季節の行事食や、誕生会では手作りケーキが出されるなど、食事を楽しむ工夫が見られた。	現在は、検食としてのみ職員がホームの食事を摂っているが、コロナ終息後は、職員も同じテーブルで同じ食事を摂ることについて、再検討することが期待される。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養のバランスや1日の水分摂取量の把握は職員は理解している。利用者に応じた食事形態、食べやすい工夫を行いながら、健康への影響がないか対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアの実施、週一回の訪問歯科診療を受け口腔内の清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレ誘導を随時行い、排泄の機会を多く持っている。昼夜でパットを区別する事で日中のトイレ使用を増やしたり、立位が難しい方に関しても、必ずトイレに座ってもらう事で定期的な排便があっている。	日中は、時間や利用者の様子をみながら、ほとんどの方をトイレ誘導している。夜間は、トイレ誘導の方、ポータブルトイレ使用の方、おむつ交換の方など、一人ひとりに応じた支援を行っている。入所時は車いす使用で失敗も多かった方が、歩けるようになりトイレにも行って、失敗がほとんどなくなった事例もある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	1日1食は発酵食品、乳製品を取り入れたり、繊維の多い食材をメニューに取り入れている。毎日レクレーションや体操を行い体を動かすことを取り入れている。訪問看護師を通じて相談も行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	いつでも入浴が可能な環境ではないが、タイミングに合わせ気持ちよく入浴できるように心掛けている。機械浴を導入した事で以前はシャワー浴であった方が浴槽に入り満足されている。	入浴は基本的に週3回。現在は早い時間帯に行っているが、2月から職員が増員され、好きな時間にゆっくり入浴してもらえる予定である。機械浴が導入されたことで、多くの利用者が浴槽に浸かることができるようになっている。また、しょうぶ湯・かぼす湯など季節のお湯を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を活性化するような支援や日光浴を取り入れ、生活のリズムを整えることに努めている。夜間に眠れない利用者がある時には、話を傾聴したりお茶を飲んで頂いたりし、気持ちの安定に努めている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は薬の目的や副作用、用法や用量に関して理解できている。薬剤師を講師として安全な内服方法の研修も予定している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	塗り絵を楽しみにしている方の作品を皆さんに見て頂けるよう掲示したり、また他の利用者へのプレゼントに使わせて頂いたりした。家事を得意とされている方には食材切りを継続して行って頂き日々張りのある暮らしを支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ドライブや家族との外出の機会を持てた時期もあったがコロナ感染防止の観点から最近では近隣への散歩に留まっている。	コロナ禍の今は、外出を楽しむことはなかなか困難であるが、近隣の散歩の他、花見や大イチョウなどを見に、時にはドライブで気分転換を図っている。	コロナ禍が落ち着いた際には、家族の協力も得て、積極的な個別支援の外出も期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	職員はお金を持つことの大切さは理解できている。金銭の把握も行えている。代わりに買い物をしたり、移動販売を利用する事で買い物の楽しみの支援を行っている。管理に関しては出来ている方とそうでない方がおられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍で特に重要なツールとして利用している。字が書けない方に関しては代わり返信を出したり、電話でも耳が聞こえづらい方の配慮や、本人の希望を取り入れている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者にとって不快や刺激にならないよう、分かりやすい場所の掲示を行っている。花や職員作成の飾り物で季節感も出せている。	リビングにはテレビ・ソファ・テーブル・椅子などが配置されており、車椅子の移動に危険がないように動線を確保し、密にならないよう配慮している。また、利用者の相性によってレイアウトを変えられるよう家具の配置にも留意している。リビングや玄関・廊下の壁には、利用者と一緒に作った季節の貼り絵や写真、利用者の新年のメッセージ、利用者の作品である塗り絵などが飾られ、日頃の活動の様子が伺える。居室エリアのヒノキの長い廊下はワックスもかかってピカピカに光っており、気持ちの良い、居心地の良さが感じられた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	レイアウトを固定せず、その方が居たい、過ごしやすい場所作りを行っている。コロナ禍で限られた空間でのソーシャルディスタンスが難しい面もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族に協力して頂き、入居時に馴染みのものを持参いただいたり、利用者の要望に応じて掲示物を貼ったり安全に配慮したベットの位置などを検討したりしている。	居室入り口にはそれぞれが持参した暖簾と手作りの個性ある表札が掛けられ、風情が感じられるとともに自分の部屋が分かり易くなっている。各居室は、作り付けの大きな収納と利用者が持ち込んでいるタンス等によく整理されている。それぞれにテレビ・ソファ・椅子などを配置し、家族写真やぬいぐるみ・100歳のお祝いメッセージなど飾った部屋もあり、一人ひとりに応じた居心地の良い部屋作りとなっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	センサーマットや滑り止めマットを利用しながら、家具の設置などを工夫し残存機能を生かしながら自立を支援している。利用者自身で理解できるような掲示物や表札などを工夫している。		